

山村における人々のつながりの変遷と現状 —長野県大鹿村を事例として—

大森彩・土屋俊幸（東農工大院農）

要旨：山村では近年、過疎化・高齢化、農林業の衰退による産業基盤の崩壊といった問題が生じている。この現状において山村での生活を維持していくことが課題となる。そこで本研究では、昔から山村の生活を維持してきた仕組みの1つとして人々のつながりに着目した。本研究では長野県大鹿村W集落を事例に、人々のつながりの変遷と現状を明らかにした。調査の結果、生活水準の向上等の要因から、農業など生業を支える面での人々のつながりは衰退したが、娯楽におけるつながりは現在でも多様に作られていて、多くの人が必要としていることが分かった。また集落の維持に関するつながりは現在まで存続している。また高齢化に対応して高齢者を支援するような組織が作られるなど、現状に合わせて新しいつながりが生まれている。このように、人々のつながりは現在でも生活を維持する仕組みとして機能しているといえる。

I 研究の背景・目的

山村では高度経済成長を始め様々な影響によって、過疎化・高齢化、農林業の衰退による産業基盤の崩壊といった問題が生じている。このような状況の中で、山村での生活を維持するのが困難になってきているところも出てきており、山村社会の崩壊の危機にまで直面している。これまで山村振興法をはじめ様々な対策がとられ、生活基盤、産業基盤の整備などが行われてきたが、事態は一層深刻化している(2)。この現状で山村での生活を維持していくことが課題となる。本研究では、そのような山村の現状に適応して今後も生活し続けていくためにはどうすればよいのか、ということを考えたい。

そのため、本研究では山村における「人々のつながり」に着目する。人々のつながりは昔から山村での生活を支えてきた仕組みであると言える。具体的には近所の人とお茶を飲む関係のような些細なものから、農作業を行う際に協働する「ユイ」や、娯楽としての「祭り」を行う組織などが考えられる。人々のつながりに関する既存の研究では、現在の家族のつながりや地縁的つながりを扱った研究(1)や、地域づくりの視点からいくつかのつながりの活動について取り上げられている研究(3)が挙げられる。このように様々な種類があるが、人々のつながりは現在でも山村で生活していく上で重要な機能を果たしているのではないか。

そこで本研究では人々のつながりがどのような影響の中でどう変化してきたか、そして現状はどうなっているのかを明らかにし、今後の展望を示したい。

II 研究の課題・手法

調査地として長野県下伊那郡大鹿村を選定した。選定

の理由は、全村が振興山村に指定され過疎化・高齢化が著しいこと、また約200年間村人の手で歌舞伎が続けられてきたことである。本研究では大鹿村の中でも典型的な山村集落であるW集落を中心に調査する。

本研究で扱う人々のつながりは、人々と一緒にになって何かを成し遂げる、協力する関係である。聞き取り調査、文献調査の結果より、人々のつながりの変遷と現状を明らかにする。そしてそれを踏まえW集落におけるつながりの現状を把握し、今後の展望を示すこととする。

なお聞き取り調査は2005年7月20日から11月14日までの間に計19日間行った。集落の各戸調査については2005年11月時点でW自治会に所属する36世帯中34世帯43人について行った。また大鹿村の人々のつながりに関して計3人に聞き取り調査を行った。

III 調査地の概要

大鹿村は長野県南部に位置し、耕地率1%，林野率89%の典型的な山村である。また、人口は2000年現在1,522人、高齢者率41.8%であり、振興山村に指定されている。高度経済成長期に加え1961年に起きた集中豪雨による土砂災害（以下「36災」）により、村は早くから過疎化が進行した。産業別就業人口を見ると、かつては農業が大半を占めたがその割合は減少し続けている。2000年ではサービス業22.8%，次いで農業21.6%，建設業18.6%である。

大鹿村は南北にO地区とK地区に分けられる。かつてはそれぞれ別の村であったが、1889年に合併し大鹿村となった。また2004年に隣接する町との合併の話が持ち上がったが、住民投票によって合併を拒否し現在に至っている。さらに、2005年には「美しい村」連合に加盟して

いる。

大鹿村では約200年間村人の手で歌舞伎が続けられてきた。かつては集落の祭りの余興として集落単位で行われたのだが、現在は村単位の組織「大鹿歌舞伎保存会」によって年に2回定期公演が行われている。

W集落は大鹿村の中心部から南へ2キロの位置にあり、標高840～900m、南西になだらかに下る丘陵に拓けた典型的な山村集落である。2000年の国勢調査によると人口106人、世帯数43世帯で、大鹿村の中では比較的大きな集落である。

V W集落における昔からのつながりの変遷と現状

高度経済成長期以前において、W集落の人々のつながりの多くが集落単位のものであった。

まず、W集落では図-1のように5つの班割りがされ、この班単位で集落の運営を交代で担っている。担当の班は自治会長、書記などの役員を選出し、集落の行事の運営等を行っている。この仕組みは現在まで続いている。なお、「自治会」という呼称は、行政側からの要請で1980年ごろから使われるようになっている。

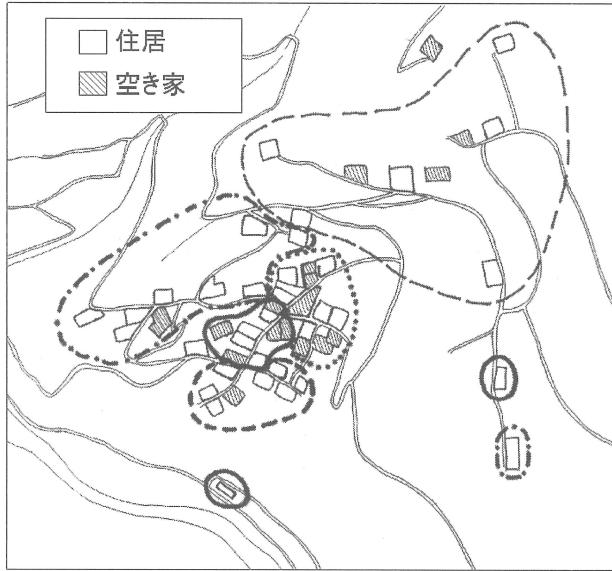


図-1 W集落の班分け 資料：聞き取り調査より

班や集落では様々な行事等が行われている。班単位では新年会などが行われていたが、現在は過疎化、高齢化の影響で一部の班でのみ行われている。集落全体としては道普請などの村仕事や、いくつかの祭り・行事が行われてきた。祭り・行事は人々の娯楽として重要であった。例えば集落内にあるN神社では春と秋に祭りが行われる。かつて祭りは神事を行う「ほんまつり」と、その前日に行う「よいまつり」に分かれていた。よいまつりでは余興として歌舞伎などの芸能が行われ、集落内の人々が大勢来てにぎやかだったという。しかし現在ではよいまつり

は行われず、参加者も祭りの運営係と氏子総代、他数人のみとなっている。その背景として考えられるのは、担い手が少なくなっていること、また娯楽の多様化で祭りに楽しみを見出さなくなったことなどがある。

また、大鹿村単位で青年団や婦人会といった年齢や性別による組織が存在し、活発に活動してきた。特に青年団には「団に入らなければ一人前になれない」というように、通過儀礼としての意味があった。しかし現在ではそれらの活動は縮小してきている。それは、若者の減少だけでなく、組織に入らない人が出てきたことも大きい。現在は通過儀礼の意味が失われ、加入することに対しても強制力がなくなったと考えられる。一方戦後につくられた「老人クラブ」は、人数が多いからか、現在も集落や村で活発に活動している。

かつて大鹿村の主要な産業であった農業や、屋根替えや新築等住居に関しては、労働の交換である「ユイ」が見られ、大きな役割を果たしていた。聞き取り調査によると、山村での生活は「経済的に貧しかったが、ユイは金がかからない」、また「晴れた日に一度にやれるというように、いい制度であった」という。現在では農家の減少、農業の機械化等の影響でほとんど見られず、親戚同士で畠作業を共同で行う程度である。住居に関しては業者に依頼するようになっている。

V 新しいつながり

ユイや祭りが衰退している一方で、近年新しくつながりが作られてきている。女性の集まりとしては若妻会（20～30代の子連れ）、ひよこクラブ（保育園に行っていない子とその親）、趣味を楽しむ場として公民館のサークル、行政主導による高齢者のための組織として「ひまわり会」「すこやか会」等様々な組織が結成されている。これらは村単位の組織であり、集落外の人との交流の場となっている。一方W集落では消防団を退団した男性の集まりである「満会」が作られている。

また最近ではW集落の住民によって2002年に「楽姓（らくしょう）クラブ」、2005年に「W地区整美隊」が結成された。楽姓クラブは50～80代の女性によって構成され、遊休農地の活用と、集落内の人々と集まる目的としている。特に、最近では昔からのつながりが衰退し、集落内の人と会う機会が少なくなっていることから、楽姓クラブに参加することで、その機会を得ているようだ。人々に会えて楽しいという感想を多くの参加者が述べている。W地区整美隊も草刈や遊休農地の整備等、集落内の整備を行うこと、かつ集まることを目的としている。なおこの団体は、農業政策の直接支払制度の中の集落協定に基づく補助金を活用している。主に50～70代の男性によって構成されている。これらのつながりは、集落内の全員が参加しているものではないが、集落内の

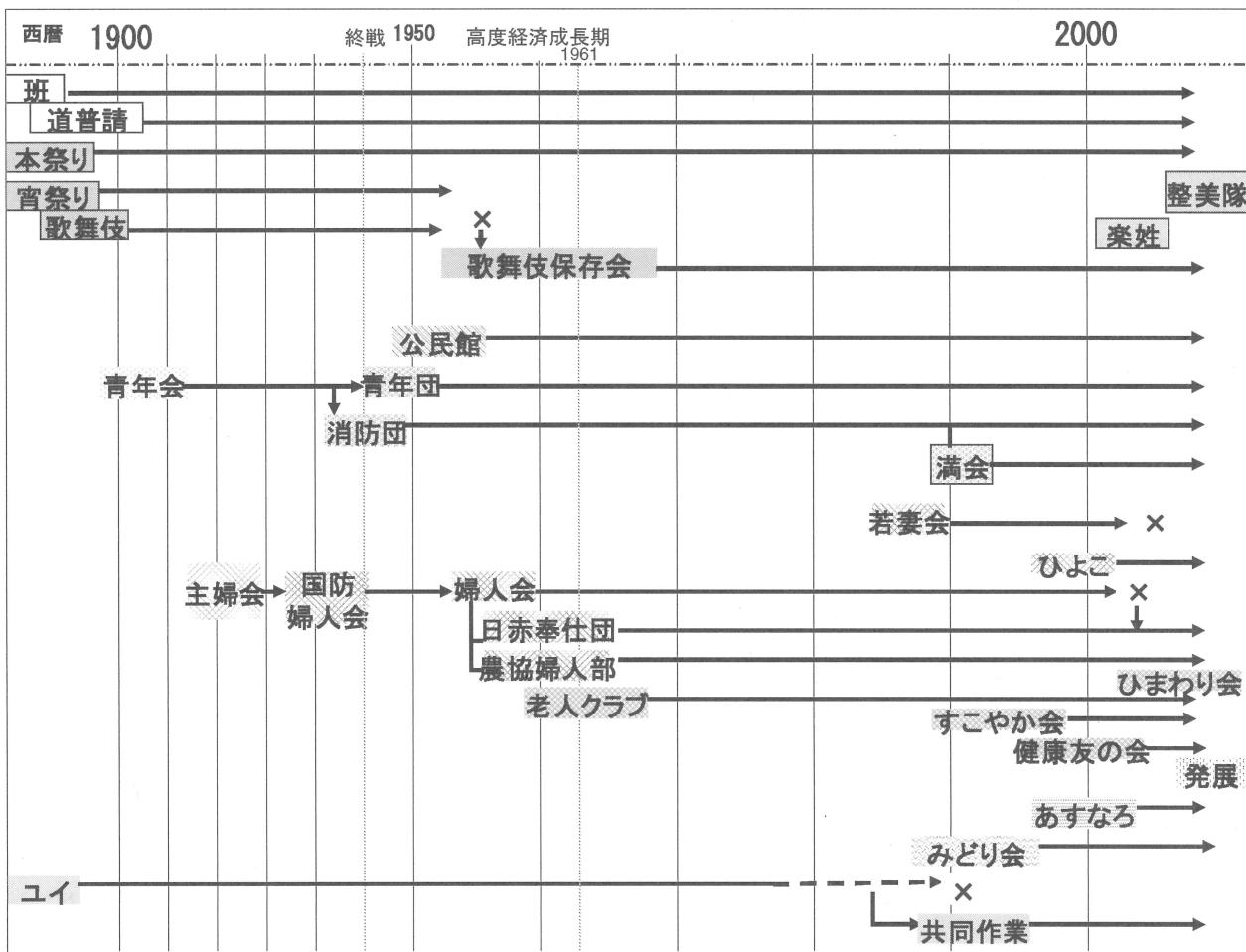


図-2 W集落の人々のつながりの変遷

注：楽姓=楽姓クラブ、整美隊=W地区整美隊、ひよこ=ひよこクラブ、発展=大鹿村を発展させる会、あすなろ=あすなろボランティア。なお、図中の枠の付いたつながりは集落単位のつながりである。

資料：『大鹿村誌』中巻、大鹿村誌刊行委員会、1984年 及び聞き取り調査より作成。

人々をつなげる役割があると考えられる。

VI 人々のつながりの変遷と現状

図-2にW集落の人々のつながりの変遷を示した。

1. 昔からのつながり 昔から続いてきた人々のつながりは、高度経済成長と36災の影響で大きく変化したと考えられる。具体的に変化を起こした要因として以下の3点が挙げられる。1点目が過疎化・高齢化である。つながりの担い手の減少を招き、あらゆるつながりを衰退させた。2点目は職業の多様化である。農業を営む人が減り、恒常的勤務等のためふだん家を留守にする人が増えたことで、集落の祭りに人が来なくなったりユイができなくなったりした。3点目が生活水準の向上である。便利になり物が豊かになり、必要でなくなったつながりは衰退していった。またそれによって様々な楽しみ方を見出せるようになったと言えよう。

このように、昔からのつながりの多くは衰退しているが、すべてが失われようとしているわけではない。例え

ば、集落の運営形態も多少の変化があったものの戦後から今日までほぼ変わっていない。現在においても必要であるつながりは、時代の流れに合わせながら残ってきた。

2. 新しくつくられたつながりの性格 近年新しく作られたつながりの性格を昔からのつながりとの関わりから見ると、以下の4点が考えられる。

1点目として、昔のつながりの機能を移動させたものがある。例えば人々の楽しみは祭りであったが、現在は公民館のサークル活動など様々なつながりに楽しみを見出せるようになった。2点目として昔からのつながりから分化したものである。婦人会には年齢制限がなかったが、現在は年齢幅の狭い若妻会、ひよこクラブが作られている。3点目として、衰退しているつながりを補完するものである。W集落では集落内のつながりが衰退している中で、集落の人々で集まる目的として楽姓クラブ、W地区整美隊が結成された。4点目は昔からのつながりとは関係なく、新しく時代の流れを受けるなどして作ら

れたものである。高齢化を受けてひまわり会などの高齢者の集まりや、「あすなろボランティア」のような高齢者を援助する目的を持つ組織などがある。

ところで、昔から続いてきたつながりと新しく作られたつながりには、異なる性格がある。昔からのつながりは地縁・年齢・血縁などの定められた範囲で構成され、それへの参加は何らかの形で強制的だったと考えられる。一方新たに生まれたつながりは上に述べた範囲に限らずある特定の目的のために作られ、それへの参加は個人の意思で決められている。

3. 人々のつながりの現状 W集落の人々のつながりの現状を図-3に単位ごとに区分けして示す。前述のような様々な変化によって、全体的な傾向としていえることは、集落内のつながりは衰退傾向にあり、村という単位の活動が多くなってきていて、そのつながり方は様々である、ということである。

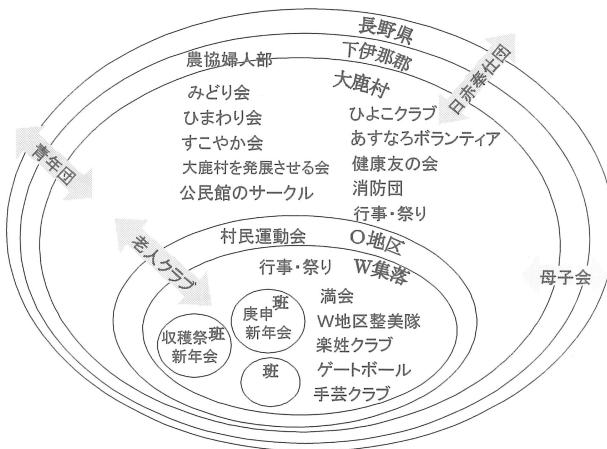


図-3 W集落の人々のつながり

資料：聞き取り調査より作成。

集落のつながりの減少に対しては「仕方ない」と感じている人が多かったが、集落のつながりが少なくなり寂しいと話す人もいた。一方で楽姓クラブなど集落のつながりを別の形で作ろうとする動きも見られる。ある人の話では、集落では昔は夕方になると自然に集まって飲み会をやっていたが、現在は組織の中でいつ集まるか決めないとなかなか集まらないという。その中で、楽姓クラブのような組織化された人々のつながりは、今日大きな意味を占めていると考えられる。

一方、大鹿村単位のつながりは多様であり、それらの多くがそれぞれの人が「楽しむため」「やりたいから」関わっている。つまり娯楽目的のつながりが多い。聞き取り調査から、各人がそれぞれ好きなつながりに参加することで、楽しみを見出しているようだ。生活様式が変わり娯楽の見出し方は多様化してきたと考えられるが、集落内では人口が少なく娯楽の多様化に対応した多様なつながりを作ることができない。村という単位に広げる

ことで、多様なつながりを作ることを可能にしたといえる。さらに、娯楽目的以外でも、青年団は人口減少に対応し村単位の組織にすることによって、その存続が可能になっている。

VII おわりに

昔からのつながりとして、まずユイのように生業のために必要なつながりは、生活水準の向上によってほとんど必要ではなくなったと考えられる。しかし道普請など集落の維持に関するつながりは今後も必要であり、また娯楽としてのつながりは誰もが必要としていると考えられる。このように、過疎化・高齢化など昔から山村の生活を維持してきたつながりを変化させる様々な現象によって、あるものは消滅したが、いくつかのつながりは残り、あるいは別の形で存続しているものもある。それは人々が時代に適応するためつながり方を変化させた結果であるとも言えるだろう。また、高齢化に対応して、高齢者を支援するような組織が作られるなど、現状に合わせて新たなつながりも生まれている。このことから、人々のつながりは現在でも山村で生活する上で必要な仕組みであると言える。そのつながりは、時代に合わせて人々がつくり上げたつながりである。

今後の課題としては、変遷の過程をより詳しく調査することで、つながりを持続していく方法を見いだしたい。また、新しくつながりを生み出すきっかけを見出すことも必要であると思う。さらに、大鹿村内の他集落、また他地方の集落との比較調査も残された課題である。

謝辞

本研究の調査にご協力頂きました、大鹿村の皆様、特にW集落の皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

参考文献

- (1) 奥田裕規・立花敏・大松美穂・久保山裕史・横田康裕・井上真 (2001) 山村集落の生活を支える人的つながり－岩手県沢内村を例に－. 日本林学会誌83(1): 47~52
- (2) 野口俊邦 (2004) 山村対策. (森林政策学. 堀正紘編, 334pp., 日本林業調査会, 東京) 180~183
- (3) 長谷川昭彦 (1996) 過疎地域における集団組織と地域活性化. (過疎地域の景観と集団. 長谷川昭彦編, 363pp., 日本経済評論社, 東京) 278~363